

編集室から

今年もやっと、新米ができました。

春、ゴールドンウィークに田植え。シルバーウィークに稲刈りでした。初夏に雨が続き、日照不足の影響から、いつもより一週間遅らせての収穫でしたが、それでも未熟な米がかなりありました。結果的に、例年よりも収量が少なかった去年よりも、更に少ない出来となっていました。

数年前に米不足で日本中が大騒ぎをした記憶がありますが、今年はそれほど騒がれていないようです。僕の集落近辺ではほぼ全戸で収穫減となっているのですが、一部地域だけなのでしょうか。

毎年できるだけ農薬は使わないようにしていたのですが、今年は出張が続いて撒布自体ができませんでした。今回のような天候不順の際には、その影響が大きく出ます。農薬とは巧妙なネーミングで、実際には殺虫剤・除草剤・殺菌剤などです。除虫・除草はなんとかなくても、病原菌だけは人間と同じで病気に強い健康な稲作りということに尽きるようです。

生協の方に聞いたのですが、無農薬の野菜に青虫が入っていたとクレームがあり、交換。ところが交換後にもやはり虫が入っていて大変だったそうです。僕からすると、野菜の虫は無農薬であることを、これ以上無く明確にしてくれている証なのですが...

同じ日本語を話していても、会話が通じない社会は、果たして幸福な世の中なのでしょう。作物の手間が判れば、流通のあり方も必然的に変わってゆくことでしょう。単にレジヤーの一環のような、楽しい収穫の部分だけが切り離された農業体験から学べることは限られてしまいます。『いのち』に関わることであれば、もう少し色々な学び合いが必要ではないかと思うのです。(は)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2009/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2009/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



石川県山中町にて
by hama

寄稿『ライフログでは満たせない 地方の魅力』

木下 斉

仕事柄全国各地を訪れる機会が多いのですが、最近行った先々でライフログを残すことを楽しみにしています。

まず出張先での行動を残すのにポータブルのGPS記録キットを持ち歩いて、町歩きした履歴を残す。さらにその履歴と撮影した写真とを同期して保存して、それを 구글アースと連動させています。これでその地域でどこを歩いて、どんな風景の場所だったのか後から思い出すことが容易になり、他の方にプレゼンする際に利用することも出来て便利です。

もう一つは携帯電話での移動履歴保存です。最近、「位置ゲー」と呼ばれる携帯ゲームが流行しています。自分の移動した位置をGPSなどで記録して遊ぶゲームです。有名なものでは「コロブラ」「ゲイタイ国盗り合戦」がありますが、私はコロブラで遊んでいます。移動した距離等でプラというポイントが貯めて、そのプラを元手に自分の街を作っていく。昔前のシムシティのようなゲームです。面白いのは、訪問地域に即した仮想アイテムが手に入るところです。熊本に行けば「辛子レンコン」といった具合にゲーム内でその土地に移動した人にしか手に入らない限定アイテムが手に入る仕組み。さらに最近では、地方の観光協会や店舗と連携して、実際の店に訪れて初めて手に入る幻の

ゲームアイテム、特別な観光ツアーでしか手に入らない幻のポイントなど仮想空間と実際の移動が結びついた企画を行っています。このような「位置ゲー」市場は既に百万ユーザー以上へと拡大しており、今後は地域活性化での活用が考えられると思っています。

ぜひ地方に行くことが多いと思われまます皆様もぜひこのようなライフログサービスを利用してみて頂ければと思います。

とはいえ、このようなGPSによる位置情報や購買情報で残せるものは本当にわずか。結局はその土地に住民との出会い、旨かった食事やお酒がかけがえのないものだったりします。結局ライフログは記録に過ぎず、記憶は残せないという限界があります。さらに何より地域にある魅力は何回かいった程度の記録や記憶では全く分らない。訪問すればするほどに発見がある。

あーだから同じところに何度も行ってしまっんですよね。勧めておきながらなんですが、このような欲求の前にライフログは無力なのです。



【プロフィール】
(きのしたひとし)
株式会社商店街ネットワーク代表取締役、熊本城東マネジメント株式会社代表取締役など。十月に「まちづくりの“経営力”養成講座」を出版予定。

濱のつぶやき 『八合目』

(前号より続く)七合目の途中から、体調が思わしくない仲間と二人で殿(しんがり)となった。

度々休憩を取らなければならなかった。頂上を見上げては、未だあんなにあると弱音を吐く仲間。「そっだねでも下を見てご覧。もうあんなに登ってきたよ。凄いやないか。」と思わず口にする。この言葉は自分にも言い聞かせていると気付くのに、それ程時間は必要なかった。

単独行なら自己都合で何とでもなる。が、一旦仲間を預かった以上、投げ出す訳には行かない。

人は兎角、前を見る。行く手の遙かなるを見て、望が萎える。理想主義の傾向が強い自分は特にそうである。が、越し方に目を向ければ、これまで歩んできた道程もまた、遙かであることに気付く。

現代の日本では、社会人となって人様から褒められることは、そうない。であれば、自分で自らの越し方を想い、時々褒めてもバチは当たらない。

ゆっくり歩いても五時間と知らされていた五合目から八合目。未だ七合目をやや越えた処でありながら、陽が暮れ始めていた。急速に辺りが暗くなる。「本隊は今頃、宿に着いて暖まっている頃か。」と仲間がつぶやく。「いやいや。あちらも未だだろう。メールが来ない。」今時の富士登山は便利だ。携帯電話が通じる。何かあったら、連絡は取れる安心は大きい。

宿はもうすぐそこはす。最後の力を出すために、

瀧行で河野先生から教わった発声法を実践する。声あるいは気合とは不思議なものである。歩き始めてやがて六時間を越えようという限界ギリギリでも、また身体が動き始め、ズンズン登れる。



宿はこの先、未だ上

二十時を回って漸く、八合目最高点にある宿の玄関をくぐった。我々の本隊は、なんとその玄関に居た。たった数分前に到着したのだという。信じられない速度で挽回したことに気付いた。下界に居れば何とも無い再会が、此処では互いを案ずる思いから、感動になった。翌朝は、「ご来光を拝む予定。宿からは起床を未明一時と告げられていた。

夕食はレトルトと思われるカレー。それでも美味しい。熟睡しようと思つて缶ビールを注文。やはり高所。泡だらけで味を感じない。

寝床は布団一枚に二人で横になるといふ混雑ぶり。気が立っているのか、眠れない。ややあって今度は両脚が攣ってしまった。仮眠中の仲間が交代で手当てをしてくれる。寝たのか、寝なかつたのか。

やがて起床時刻となる。雨雲に覆われていた外は、一転して夜景が見事だった。下から列を成して登ってくる人々の列が光の帯となっていた。(次号に続く)

今年、青森県が生んだ作家である太宰治の生誕100年であり、太宰にゆかりのある青森県津軽地方各地でイベントや博物館の特別展などが多数行われている。青森や弘前の書店では太宰の本が並び、地元客、観光客で盛況のようである。

シンクタンク在籍時の平成13年度に青森県文化観光推進課（当時）の業務で、『太宰への道』調査・パンフレット作成』を担当した。この当時の委託業務とすれば、珍しいジャンルであった。自治体単位あるいは観光協議会等で観光資源や観光施設を網羅的に載せたパンフレットの類はたくさんあったが、文学を題材に、また特定の人物を題材にした観光パンフレットは、青森県になかったと思う。

津軽地方が出てくる太宰の本をチェックし、現地に行って記念碑や風景を確認・撮影し、原稿を書き起こすという作業で、新しいものを作る楽しみがあった。

青森県庁の観光情報サイト「アプティネット」内に「太宰への道」のページがある。そこでは太宰の著である「津軽」に出てくる場所を中心に4つの観光ルートを提示している。「津軽」は昭和19年に太宰が実際に津軽地方を巡って書かれている。この太宰の作品がなかったら、観光ルート「太宰への道」は生まれなかったであろう。没後60年を経てもなお観光資源となる遺産をくれた太宰に感謝である。

1. 感動の再会ルート（1泊2日） 太宰と乳母タケの出会いと再会
・ 経由順 五所川原市金木、中泊町小泊
2. 外ヶ浜街道ルート（2泊3日） 青森・外ヶ浜に行く
・ 経由順 青森市、外ヶ浜町蟹田・三厩、五所川原市金木、中泊町小泊
3. 津軽富士眺望ルート（3泊4日） 名峰岩木山を仰ぎ見ながら
・ 経由順 弘前市、深浦町、五所川原市金木
4. 小説「津軽」再現ルート（4泊5日） 太宰の津軽を追体験
・ 経由順 外ヶ浜町蟹田・三厩、今別町、深浦町、五所川原市金木、中泊町小泊

モデルルートをみると、太宰の生家「斜陽館」がある金木、小説津軽の最後、タケとの再会を果たす小泊の小説「津軽」の像記念館などが中心となっている。

一方、JR東日本秋田支社においては、「太宰治生誕100年スタンプラリー」とし、津軽地方の9ヶ所にスタンプを設置している。ユニークな場所としては、太宰が通っていた弘前の喫茶店で、いまでも営業している「万茶ン」、五所川原市金木の旧芦野公園駅舎を利用した喫茶「駅舎」がある。「駅舎」では、「万茶ン」よりコーヒー豆を取り寄せ、太宰が通っていた頃の味を出しているという。近年になって弘前で太宰が下宿していた家が「太宰まなびの家」として、深浦町では太宰が宿泊した宿が「ふかうら文学館」として、それぞれ生まれ変わった。

このように津軽の各地に太宰に関連する観光資源が発掘、観光施設が整備されてきており、これまでの「斜陽館」などに加え、多様な観光ルートが描けるようになってきた。生誕100年後もストーリー性を持った観光ルートとして持続、発展していくことを期待したい。

相続について

相続人に行方不明者がいる場合

今回のケースは、相続人の中に行方不明者がいる場合の相談です。

Case Study

八田さん（仮名）の家族は妻と一男二女です。その長男は大学卒業後、東京で就職しましたが、10年ほど経ったとき、親である八田さんには何の相談もなく、勝手に会社を辞めてしまい、その後音信不通になりました。

八田さんは、自分の財産を妻と子には争うことなく、きちんと分割しておきたいという思いがあり、とくに行方の知れない長男を不憫に思っており、できれば長男にも法定相続分くらいは渡るようにしたいと思っていました。

Answer

こういう場合は、行方不明の長男雅彦さんにも財産が渡るように、遺言状を作成しておけば安心です。

これは長男の行方が判明した場合に備えて、その旨と財産取得分を具体的に明記しておくといよいでしょう。

下記に例を挙げておきます。

遺言者八田裕一は、次のとおり遺言する。

- 一、 妻八田一美には、次の財産を相続させる。
石川県金沢市 町 丁目12-xx番地
宅地 平方メートル
- 二、 長女清水由美には、次の財産を相続させる。
現金1,500万円
- 三、 次女八田史恵には、次の財産を相続させる。
現金1,000万円と「石川330ち」
乗用車を相続させる。
- 四、 遺言者の長男八田雅彦が生存しており、所在が明らかになった場合は、長女清水由美と次女史恵は長男雅彦に対し、現金300万円ずつを相続分として引き渡すものとする。

ではこのように遺言状がなかった場合はどうなるのでしょうか？

残された相続人全員で、遺産分割協議をしなくてはならないため、このように相続人の中に「不在者財産管理人」の選任や「失踪宣告」などの手間と時間のかかる手続きが必要になるだけでなく、相続人が遺産を取得するまでに長い時間がかかってしまいます。

ですから、遺言状を残すことによって、スムーズな遺産相続ができるようにきちんと準備しておきたいものです。

9月19日から浜松フラワーパークを舞台に「浜松モザイクカルチャー世界博2009」が始まった。殆どの方がモザイクカルチャーと言う。モザイク模様？モザイクがかかったモノカルチャー？何だかわからないって言われるので、「浜名湖立体花博」と愛称をつけた。

そう、このモザイクカルチャーは、花と緑の立体アートなのだ。トピアリーのように木を刈り込んだものとは違い、フレームをマットで覆い、小さな花や緑のポットを植え込んでいくものだ。



その作品は、海外25カ国 国内からは40の県・市が出展している。

開始一週間前の内覧会では、下地のマットが見えていたが日を追うことに緑に覆われてくることになるだろう。その変化も面白そうだ。まさに、生きているアートなのである。

モントリオールで2回、上海そして浜松 3年ごとに開催されている。日本では初のお目見えになる。

そこに小生の友人がNO.64「浜松野菜を召し上がれ」を出展している。その誕生物語がいい。***浜松市にモザイクカルチャー推進課が立ち上がって間もない頃、「うちなら浜松の野菜で作ります。」とその場の思い付きを口に出したが「前例が無いので本部に聞きます。」と言われ、「わざわざ聞かなくてもいいですよ。」と逃げて帰った。

迂闊な発言を悔い、その後、ほとぼりが冷めるまでと、1年ほど推進課に寄らないでいたが、「本部の了承を得ましたので、丸一物産(株)さんをリストに記載しました。」と宣告され退路を絶たれてしまった。

何でも聞いてくれる鍛冶屋さんが、今春、不慮の事故で亡くなり、あてにしていた農家に野菜の苗の栽培をお願いすれば、「病虫害が一番多い時期だよ。よせよせ。無理無理」と取り合ってくれず、ギブアップもできず困り果てていた。



「捨てる神あれば拾う神あり」「地獄で仏」異業種・異地域・異世代交

流会の「めだかの学校」(三の倍数月の第一金曜日夜に開校)の仲間の服部さんらに製作協力をお願いしたところ、「面白い、やろう」と即答を得たので、その場で相談して、野菜で作ることを諦め、野菜を罫すことにした。服部さんが孟宗竹を森町の鈴木(温室用ボイラーメーカー)宅へ運び込み、大きな盛籠を作り、鈴木さんが鉄骨から植栽までの殆どをこなしてくれた。



服部氏はメロンの茎に見立てた杉の丸太を、春野の尾上さんの山から切り出し、鉄骨以外の全ての製作に皆勤で携わってくれた。植生用の苗の約半分は、島田の池谷俊裕さんが栽培したものだ。***

ここに名前が出てくる服部、鈴木、尾上、池谷は全て「めだかの学校」の同級生。学校での縁で、皆が支えあった。小生はこの「めだかの学校」の遠足がきっかけで由布院観光総合事務所の事務局長を務めることになったのだから、人との出会いは実におもしろい。



さあ、この労作「浜松野菜を召し上がれ」はじめ、皆様がこれまで見たこともない立体の花と緑のアート「モザイクカルチャー」をご覧に浜松にお越しください。石川県の方はもちろん小松空港から真紅の飛行機に乗って富士山静岡空港に降り立ち浜松にお向かいくださいませ。

会場の浜松フラワーパークのそば、歩いて行ける距離には館山寺温泉があり、宿泊するもよし、食事+温泉も楽しむことができる。さらに足を奥浜名湖にのばせば、小堀遠州の庭園のある龍澤寺、東海地方最大の鍾乳洞「龍ヶ岩洞」きじ料理の「きじ亭」、大本山方広寺がある。10月11日には浜松市の街の真中を音楽で覆い尽くす「やまいかミュージックフェスティバル」、25日には「第3回浜松餃子まつり」、24日から11月8日までは「第24回国民文化祭」がある。



では、皆様方の来浜を鶴首にてお待ちしております。